

● 2015年12月号解題

労働研究と質的調査

『日本労働研究雑誌』編集委員会

労働研究のさらなる発展のために、質的調査に関する理解を広げることが、本号特集の目的である。

改めていうまでもなく、労働調査が学術的な研究といえるためには、何をどのような方法で明らかにしているか、その研究方法に妥当性がないといけない。加えて、方法の妥当性に関する理解が広く共有されていることも重要である。「はてなの茶碗」（茶金）という落語がある。茶屋に寄った高名な茶道具屋が安物の茶碗をじっと見つめていたら、それを見ていた素人が価値ある品に違いないと勘違いするという話である。専門的な評価にはわかる人にしかわからない面がある。研究の評価も例外ではない。だが、「あの先生が良いというのだから良い」というのでは、その妥当性を検証しようがない。なぜ良いのか、わからない人にもわかるように説明できる必要がある。さらに方法論が定型化されていれば、これを使う人が増えて、研究分野の活性化にもつながる。

量的調査（統計調査、アンケート調査）は、調査の手順が統計学にもとづいて定められており、教科書も入門書から最先端の解析手法の解説書までたくさんある。その上で、近年はデータ利用環境の整備と統計解析ソフトの普及もあって、計量分析が盛んに行われている。質的調査にもとづく研究も少なくはない。だが質的調査の方法を学ぶ機会は、量的調査に比べると限られている。質的調査にも教科書はあるが、肝心なところはよくわからない。マニュアル化されない形で師匠から弟子に伝承されている部分が大きい。確かに調査のスキルには言語化できない職人技のような部分がある。しかし、専門家に話を聞いてみると、やはり質的調査にも理論的根拠のある、その意味で言語化できる方法論があるようだ。その方法を読者と共有することは労働研究における質的調査の活性化につながるだろう。そのような趣旨で本特集を企画した。

前半は、戦後の労働研究を牽引してきた事例調査を題材に3人の論客が自身の調査の方法を述べて意見交

換をする座談会を開いた。社会学・経済学・工学といった専攻の違いもあって、3人の調査の仕方や調査結果のまとめ方はそれぞれ少しずつ異なる。それだけ事例調査の方法には多様性があるといえる。しかし、共通する部分もある。たとえば、問題意識の持ち方として広い文脈の中に事例を位置づけることを3人も強調している。量的調査と質的調査の比較もされているが、最も異なるのは調査の目的であろう。量的調査があらかじめ構築された概念をもとに事実を観察するのに対し、質的調査は観察された事実をもとに概念を構築する。そのために、言葉で対象を分析する力を養うことの重要性も指摘されている。

特集の後半では、今後労働研究の発展に資することが期待される新しい質的調査の方法を検討する。具体的にはオーラルヒストリー、アクションリサーチ、グラウンデッドセオリーアプローチ、ワークプレース研究を取り上げる。また、調査結果の分析方法に焦点を当て、質的調査データの二次分析と、コンピュータソフトを使った質的調査データの解析方法を紹介する。

インタビュー調査を通じて歴史的事実を明らかにしようとするオーラルヒストリーを労働研究に適用する試みは、すでに様々な研究者によって行われている。山下論文はその研究成果を検討し、方法的な利点と課題を示している。オーラルヒストリーは、文書資料に表れてこない多様な意見や利害の調整、組織内のコミュニケーションにおける身分制や社会集団の関わりを明らかにすることができる。そのような利点を指摘し、労働研究の可能性を広げるオーラルヒストリーのアプローチとして(1)特定の社会集団を代表する人物や社会的影響力の強い個人の経験に焦点を当てる「個人史のアプローチ」、(2)争議や法制化といった出来事が社会的に構成されるプロセスに焦点を当てる「イベントアプローチ」、(3)組織や特定の労働コミュニティなどの日常のあり方やその変化を特定の時期や時間の中でとらえる「構造アプローチ」を挙げ、それ

ぞれのアプローチを踏まえた調査実施の留意点と今後の研究のあり方に言及している。

フィールドワークは質的調査の代表的な方法であるが、従来は調査者が調査対象に介入し、何らかの影響を及ぼすことは望ましくないとされてきた。だが、アクションリサーチにおいては、基礎研究の知見を実践的な問題解決に役立てるために研究者も問題解決にコミットする。この方法は「研究」「訓練」「実践」を一連の過程としているが、榎野論文はこれを職業相談に適用し、認知言語学にもとづく職業相談のプロセスの意識化（研究）、その結果にもとづくハローワーク職員の研修（訓練）、研修の修了者の実践活動のフィードバック（実践）を一体的に行うことで、職業相談を効果的に行う研修プログラムの開発にアクションリサーチを応用できる可能性を検討している。

同じく職業相談への応用可能性が期待される研究方法として、若林論文はグラウンデッドセオリーアプローチ（GTA）を取り上げている。これは、フィールドワークやインタビューなどの質的調査をもとに理論を構築する研究方法である。労働分野への適用例はまだ少ないが、若林論文は精神障害者の就労支援プロセスや職業生活にGTAを適用した研究を取り上げ、社会福祉学やリハビリテーション、保健学といった分野からこの方法が労働研究に波及する可能性があることや、GTAになじむ研究テーマとしては職業相談・キャリアカウンセリングやキャリア形成、障害のある人等への就労支援、安全衛生、労働相談といった分野に適用できる可能性を述べている。

職場研究は労働調査の中心的なテーマの一つであるが、ここに新しい風を吹き込もうとしているのが、エスノメソドロジーや会話分析・相互行為分析という社会学の研究方法を応用したワークプレース研究である。会話分析では、発言者が話すときの間の取り方やイントネーションといった情報をトランスクリプトという文字情報にして分析する。相互行為分析では、分析する場面をビデオに撮り、身振り手振りや視線、座席の位置関係といった視覚で得られる情報も含めて分析する。山崎らの論文は、営利企業と協同組合の会議の比較分析にこの方法を適用し、参与観察において見た感じたりしていることを感覚的な理解にとど

めず客観的に分析している。

量的調査では近年既存調査データの二次分析が活発に行われるようになってきているが、質的調査についても二次分析が有効であることを説いているのが武田論文である。その具体的な方法として（1）オリジナル調査データを歴史的一次資料として用いる、（2）比較研究の素材として活用する、（3）オリジナル調査の時期には登場していなかった新しい概念や視点で調査データを再解釈する、（4）オリジナル調査の設計・調査法の再評価、（5）オリジナル調査の分析内容の妥当性の検証、（6）オリジナル調査データを教材として活用する方法を挙げ、事例として大正時代に月島で行われた労働者の労働実態や生活に関する調査を労働運動の観点から再解釈している。

最後の佐藤論文はQDAソフトを用いて大量の質的調査データをコンピュータで解析する方法を解説している。量的調査においてはStataやSPSSといった統計解析ソフトを用いて大規模な調査データを解析することが一般的に行われている。同様のことが質的調査においても可能になっている。これにより、分析者の直観や感性のような主観から離れて、客観的に質的調査データを分析することができる。従来もカードを使って調査データを客観化する手法はあったが、QDAソフトを使えばそのデータ処理の効率性を高めることができる。のみならず、このような情報処理技術を活用することによって「深い狭い質的調査」と「浅いが浅い量的調査」のトレードオフが解消され、「深くて広い」調査ができるようになる可能性や、データ収集から時間をおかずにデータ分析ができるようになる可能性を指摘している。

どのような研究方法にもできることとできないことがある。リアリティ豊かな実証研究が蓄積されるためには量的調査と質的調査が高いレベルでバランスよく行われることが望ましい。さらに質的調査においても、その研究方法が多様であるほど労働の世界を深く広く多角的に理解することができる。そのような示唆を本特集から得ることができる。

責任編集 池田心豪・坂爪洋美
（解題執筆 池田心豪）